

入賞

後世に語り継ぐ

10年前の福島は、東日本大震災、原子力発電所の事故から復興できるのか、これから福島はどうなってしまうのかと言われていた。しかし、今の福島は多くの人の力を借りながら復興の道を進んでいる。復興の道を進む福島にとってこれから必要なことは、後世に自然災害と原子力の恐ろしさを伝え、私達が経験したことを風化させないことである。

先日、私は大学の授業で「ここで、生きる～911、311そしてコロナ禍」の映画を視聴した。これは、ニューヨーク在住の映画監督である我謝京子さんが、東日本大震災から10年経った被災地の女性達にスポットを当て、女性達の復興への思いをインタビューした映画である。この映画で、「震災から10年経って、一番怖いのは風化することだ」と答えた被災地の女性がいた。私はこの言葉を聞き、3.11に起きたことを後世に伝えていく活動に力を入れていく必要があると感じた。

これまでの福島は、語り部による伝承活動、東日本大震災・原子力災害伝承館の設立など東日本大震災、原子力災害を後世に伝える取り組みを行ってきた。これに加えて、福島県全体で東日本大震災、原子力災害に対する思いや考えを話し合う場をつくることを提案する。このような話し合う場をつくることで、後世に伝えていくことを自分事として考えることができるのではないかと。受け身で語り部や経験者の話を聞くだけでは、自分事として捉え、考えるということができづらい。3.11を経験した私達は、どうやったら後世に自然災害と原子力の恐ろしさを伝えられるのか、解決すべき問題は何かをひとりひとりが自分事として考えなければ、20年後、30年後のこの先ずっと風化させずに、語り継いでいくのは困難だろう。

そこで、福島県の子供からお年寄りまでが参加できる東日本大震災、原子力災害について話し合うイベントをオンラインで開催するのはどうだろうか。近年、アクティ

学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム桜の聖母短期大学1年 ^{コバヤシ} ^{シホ} 小林 史歩

ブラーニングが注目されている。受動的に学ぶより能動的に学ぶ方が、知識や考え方の幅があると言われていたため、以前より大学などの教育機関では導入されていたが、その流れをうけ、今では幼稚園・小学校・中学校・高等学校にも広まってきている。そのため、能動的に学べる、東日本大震災、原子力災害に対する思いや考えを話し合う場は、お互いに意見を交換することで積極的に話し合いに参加し、考えを深めることができるのではないかと。東日本大震災、原子力災害は福島県の中でも被害の大きさや状況は異なるため、自分の住む地域以外の体験談や生の声を聞くことができる。また、年齢や性別、暮らしている環境が違えば、考えや思いは様々であるため、新しい発見があるかもしれない。意見を共有した上で、より詳しく様々な視点から東日本大震災、原子力災害を見ることができる。また、オンラインで開催することにより、福島県内のより多くの地域から参加者を募り、このコロナ禍でも感染を気にせずに行うことができるだろう。

東日本大震災、原子力災害を後世に伝えていく上で大切なことは、ひとりひとりが自然災害、原子力についての知識と3.11に何が起こっていたのかをきちんと知ることである。そしてそれが、SDGsの目標11である住み続けられるまちをつくることにつながっていく。「天災は忘れた頃にやってくる」という寺田寅彦の言葉がある。自然災害は忘れた時に再び起こるものであるという意味で、被害を忘れることの危険性を訴えている。同じ失敗を繰り返さずに、住み続けられるまちをつくるためにも、後世に自然災害と原子力の恐ろしさを伝えることが必要である。そして、後世に伝えるということは、経験した私達だからこそできる活動であり、私達の役目なのではないか。